

## 5 総社古墳群と山王廃寺

右島和夫

## (1) はじめに 一総社古墳群概観一

前橋市総社古墳群は、利根川の右岸に所在し、5世紀後半から7世紀末葉にかけて累代の首長墓から構成される一大古墳群である。分布の中心は、山王廃寺の北東方向約800mの至近であり、時期的並行関係とも相俟って、両者が直接的関係にあることは疑う余地がない。むしろ、山王廃寺を考えていく上で欠かすことのできない存在と言ったほうが当を得ている。

具体的に古墳群の展開過程を概観してみる(右島 1985)。形成の端緒を開くのは、5世紀後半の前方後円墳である遠見山古墳(墳丘長約70m)である。本格的な調査が及ぼされてないので不分明な点も多いが、堅穴式系の主体部型式で、長さ約100mに及ぶ盾形周壕と人物埴輪を含む埴輪を伴うことが部分的なトレンチ調査により明らかになっている。また周壕覆土底面寄りからは、6世紀初頭を前後した時期の降下とされる榛名山噴火火山灰層(Hr-FA)が確認されている。

6世紀初頭には、関東地方でも最も早い段階の横穴式石室を主体部とする王山古墳(前方後円墳、75.6m)が続く。安中市築瀬二子塚古墳や前橋市前二子古墳とともに、上毛野地域で先駆的に横穴式石室を採用した最大級の前方後円墳の一つであり、後円部墳頂には数多くの盾・大刀形埴輪がめぐらされる新しい埴輪樹立の流れとして注目される。さらに6世紀後半には巨室構造の横穴式石室を主体部とする総社二子山古墳(前方後円墳、約90m)へと続く。石室の壁体には、榛名山噴出の角閃石安山岩を削り加工した石材が使用されており、本来的な墳丘規模は、この時期の上毛野地域最大の高崎市綿貫観音山古墳(98m)に近いものと推察される。石室構造を共通にしていることもあわせて注目されるところである。二子山をもって首長墓における前方後円墳採用は終焉をむかえる。

前方後円墳終焉になると、首長墓は大型の方墳を採用するようになる。その最初は7世紀前半の愛宕山古墳(方墳、一辺56m)である。自然石使用の巨石巨室横穴式石室であり、玄室奥部には凝灰岩製の割抜式家形石棺が置かれている。上毛野地域のこの時期の古墳としては唯一の家形石棺である。上毛野地域で最終段階の前方後円墳から7世紀の大型方墳へと展開するのは、総社古墳群だけに限られており、この時期の歴史動向を強く反映していることが推察される。

7世紀中葉ないし第3四半期には、愛宕山古墳の南東に隣接して大型方墳の宝塔山古墳(一辺約60m)が築造される。三段築成の巨大方墳であり、最近の調査で周囲に幅約20mの壮大な周壕が取り巻いていることが確認された。この段階から切石積構造の横穴式石室になる。石室全長約12mの大型石室であり、複室構造である。極めて硬質の輝石安山岩を見事に加工して天井石・玄門石に配している点が特徴的である。その他の壁石材には、鋭く加工した角閃石安山岩を寸分の隙もないほどに積み上げており、概して極めて完成度の高い横穴式石室を実現している。壁面全体に漆喰が塗布されている点や、愛宕山古墳に引き続き家形石棺が採用されている点も注意される。石棺は、天井石等と同様な輝石安山岩を使用しており、脚部を格狭間形に造りだしている点もあわせ、加工技術の極地と言っても過言でないほどの完成度の高いものに仕上げられている。

7世紀第4四半期ないし末葉の蛇穴山古墳(方墳、一辺43m)が、総社古墳群の最後に位置づけられるものである。宝塔山古墳にくらべ、墳丘が小型化している。石室も前庭部から直接玄室に入る構造であり、やはり小型化の流れの中にある。最近の墳丘周囲の調査により、中堤の両側にも丹念な葺石を施した見事な二重周壕を備えていることが明らかになった。石室は小型化しているとは言え、輝石安山岩の单一石材を組み合わせて一段と完成度の高い横穴式石室を実現している。壁面全体に漆喰が塗布されている点は宝塔山古墳に共通する。

総社古墳群の変遷過程の中で、他に傑出した特長を示すようになるのは、前方後円墳終焉後の7世紀に入ってから、愛宕山・宝塔山・蛇穴山の3基の大型方墳が形成された時期である。とりわけ、山王廃寺と並行して造営事業が進められた宝塔山・蛇穴山古墳の内容は、東国においても他に例を見ないものである点が注目されるところである。山王廃寺の歴史的性格を検討していく際にも踏まえていく必要があるだろう。

以下、その構造的特徴と意義についてもう少し詳しく見てみたいと思う。

## (2) 角閃石安山岩削石積石室と総社二子山古墳

**角閃石安山岩削石積石室の成立** 6世紀中葉を前後した時期の榛名山噴火は、角閃石安山岩を山麓に向けて大量に噴出させた。それらは、渋川市の東側を北から南に流れ、前橋市街地の北方で南東に折れ曲がって伊勢崎市方面に流れていた旧利根川（現広瀬川）へと大量に流出した。

あたかもこの機を待ち望んでいたとばかりに、旧利根川中流域に面する前橋市から伊勢崎市にかけての河岸に沿って、この角閃石安山岩を使用した横穴式石室墳が累々と連なっている。これとは別に、高崎市東部から玉村町にかけての烏川（現利根川の一支流）左岸にも数多く認められる。その場合、烏川には角閃石安山岩の顕著な分布は認められないので、その北方の現広瀬川流域（旧利根川）で採取され、搬入された可能性が強いことが指摘されている（秋池 2000）。これらの横穴式石室の最大の特徴は、角閃石安山岩を壁石材として使用し、石室背後に位置する面を除いた上下左右と前面の5面を加工して積み上げており、奥壁・両側壁とも多石構成の壁面に仕上げている点にある。また矩形プランの両袖型石室を基本としており、明らかに玄室長が羨道長を大きく上回る点も注目される。この特徴の石室を持つ「角閃石安山岩削石積石室」と呼称している（尾崎 1966、右島 1993）。

**総社二子山古墳、観音山古墳を中心としたネットワーク** この角閃石安山岩削石積石室が、前述した旧利根川中流域、烏川下流域の諸地域に所在する最大級の前方後円墳、さらに中規模前方後円墳、大型円墳に広く採用されている。その代表が、高崎市綿貫観音山古墳と総社二子山古墳である。また、現在の前橋市街地南東部の広瀬川右岸にある不二山古墳（約50m）、山王金冠塚古墳（山王二子山ともいう。56m）、長山古墳（約78m）、大屋敷古墳（約82m）、さらに下流の左岸にある伊勢崎市安堀古墳（約80m）、阿弥陀古墳（約45m）等の前方後円墳にも認められる。一方、烏川左岸では、玉村町芝根1号墳（浄土山ともいう。54m）、小泉大塚越3号墳（46m）、小泉長塚1号墳（円丘部のみ検出。復元長約50m）等も知られている。おそらく、当該地域で6世紀後半に属するほとんどすべての前方後円墳が角閃石安山岩削石積石室を採用していたと考えて間違いないだろう。ここにあげた地域を超えたところに所在する該期の前方後円墳で角閃石安山岩削石積石室を採用している前方後円墳はほとんど知られていない。

角閃石安山岩削石積石室は、上毛野地域の横穴式石室の変遷上で見たならば、その前段階までの系譜からスムーズに導き出されたものではない。様々な技術的背景を基礎にして新たに創出された石室型式であることがわかる。それゆえ、この石室型式を共通に採用した首長層間には、より緊密な政治的ネットワークが存在していたことが推測される。その主導的な位置を占めていたのが綿貫観音山古墳と総社二子山古墳の勢力であったと考えられる。その意味では、総社二子山古墳から綿貫観音山古墳出土の頭椎大刀（当墳被葬者の保持した装飾大刀の中で、捩り環頭大刀とともに中心的な位置を占める）に酷似する大刀の出土が伝えられている点も、この想定を補強するものと言えよう。

なお、角閃石安山岩は礫径を小さくしつつも利根川の下流域まで流下している。それでも構築方法を工夫すれば壁石材として十分使用に耐えるため、元々石材の乏しかった下流域でもこれを使用した横穴式石室を実現している。左岸では、太田市から板倉町の諸地域から古河市域にまで及び、対岸でも羽生市域にまで及んでいる。その石室構造としては、一段と小振りの石材を五面削りにした多石構成とし、強い胴張りプランと壁面に持ち送りを有する点に最大の特徴がある。同じ加工石材を使用している点では、前述した角閃石安山岩削石積石室と何ら

かの関係があるものと考えられるが、系統的には異なるものである。

旧利根川中流域・烏川下流域で角閃石安山岩削石積石室を採用した前方後円墳は、最終段階の前方後円墳で、時期的には、陶邑古窯址群須恵器編年のTK43～TK209の型式的特長を有する須恵器を伴う。これを最後に前方後円墳は終焉を迎えるが、多くの有力前方後円墳が築造された諸地域では、これに続くのにふさわしい7世紀前半の首長墳が認められない点が注意されるところである。このような動向を理解していく上でも、角閃石安山岩削石積石室を共通にしたネットワークの存在は重要である。

### (3) 愛宕山古墳登場の画期性

**前方後円墳から方墳へ** 6世紀後半ないし末葉の上毛野地域には、墳丘長80～100mの前方後円墳が、適當な間隔をおいて林立する。およそ20基近くを指摘することができ、律令制の郡よりも狭い範囲に対応している。これらが最終段階の前方後円墳である。ところで、これら同時期の最大級前方後円墳の周辺を見渡したとき、これに継続したと思われる首長墓が認められるのは、総社古墳群で二子山古墳に引き続いて7世紀前半に築造された愛宕山古墳のみである。その場合、愛宕山古墳の墳丘が、一辺56mの大型方墳を実現している点は重要である。畿内における前方後円墳から方墳への有力墳の移行を踏襲しているものと思われる。この移行過程の中で上毛野地域の再編成が進められ、総社古墳群に一元化されていったことが推察される。

なお、太田市の北部にも、近い時期に巖穴山古墳（方墳、35.6m）が築造される。上毛野地域の一元化の過程で、当地域東部を取りまとめる補佐的な役割を担ったものと思われる。

**家形石棺の採用** 方墳の採用とともに注目されるのが、凝灰岩製の割抜式家形石棺の採用である。7世紀前半の時期のものとしては、上毛野地域で唯一であり、当地域の統合的な地位に就いたことをヤマト政権から承認された証と考えられる。蓋石長辺の斜面部から一部垂直にかかるように4個の縄掛突起が取り付く。畿内の形制に倣った石棺形式であったと推察される。

愛宕山古墳に続く宝塔山古墳においても家形石棺が引き続き採用されているのは、当地域における家形石棺の存在意義の想定を補強するものと考えられる。

**一元化の背景** 愛宕山古墳の成立に象徴される上毛野地域の再編成・一元化の動きの背景としてはどのようなことが考えられるのだろうか。まず、最終段階の前方後円墳を見渡したとき、決して総社二子山古墳に傑出した直接的要素が存在したわけではないことである。その意味では、前述した角閃石安山岩削石積石室を共通することに象徴される利根川中流域（含む烏川下流域）のネットワークの存在は重要である。この連携の存在が、6世紀後半から7世紀前半への地域展開の中で、これを指導する基礎をなしたものと思われる。

一方、この一元化を外側から協力に推進したのがヤマト政権であったと思われる。それは、6世紀後半の段階には、既に綿貫觀音山・総社二子山古墳に代表されるグループとの密接な関係が存在しており、その直接的結びつきの上に7世紀の展開があったと思われる。綿貫觀音山古墳や山王金冠塚古墳等に見られる豪華で豊富な副葬品の存在がその一端を物語っている（右島 2011）。

### (4) 宝塔山・蛇穴山古墳の構造的特長とその意義

ここでは、両古墳の石室構造の中で特に注意される点について取り上げ、またその意義について考えてみたい。

**切石積石室の成立** ここでは切石積石室を硬質石材使用に限定して考える。軟質石材としての凝灰岩、砂岩を加工して使用した横穴式石室が存在するが、この加工技術の流れは、広く石棺、堅穴式石櫛、横穴式石室等に認められるところである。各地に定着している伝統的な石材加工技術で実現可能なものである。

問題は、宝塔山古墳や蛇穴山古墳の場合は、極めて硬質の輝石安山岩を石材として、極めて完成度の高い切石を実現している点である。その端緒の表れは、加工されている表面にほとんど加工痕を残さない点にある。宝塔

山古墳石室では、すべての天井石、玄門石、さらには家形石棺がこれによる。一方、蛇穴山古墳では玄室を構成するすべての石材がこれによっている。

加工技術の完成度の高さとともに注目されるのが、宝塔山古墳の羨道入口部の最前端の天井石、玄室の天井石、あるいは蛇穴山古墳の玄室構成材に見られるように輝石安山岩の巨石を使用している点である。

これらのことから言えることは、従来の石材加工技術の延長上では実現できない技術力を基礎にしている点である。畿内の切石積石室等と比較した場合にも、時代の最先端の技術力が及ぼされていることがわかる。畿内においても硬質石材（花崗岩）を完成度高く加工する技術が定着するのは、7世紀前半を前後する時期と考えられる（丸山 1971）。その技術的背景には、横穴式石室や寺院造営に伴う各種石造物の石材加工の新たな登場があると考えられる。

宝塔山・蛇穴山古墳の場合にも、目と鼻の先で並行して進行した山王廃寺の寺院造営との関係を抜きにして考えることはできないだろう。新たな硬質石材の加工技術がヤマト政権を介してもたらされたと考えられよう。

**漆喰の使用** 宝塔山・蛇穴山古墳の横穴式石室の壁面が漆喰により白壁に仕上げられていた点は、関東地方の他の諸地域では全く認められないこと、畿内では天皇陵と目される古墳をはじめとして、有力古墳に限定的に認められる点で注意していく必要がある。

家形石棺の脚部を格狭間に造りだしている特長も、天武持統合葬陵の棺台に同様の意匠がある（秋山 1979）と伝えられている点等を踏まえると漆喰と同様の位置づけが可能と思われる。

**宝塔山古墳と黄金塚古墳** 奈良市帶解に所在する陵墓参考地の黄金塚古墳は、南辺27.5m、東辺26.5m、高さ約5mの2段築成の方墳で、周囲には幅15m前後の壕を挟んでその外側に幅15~20m、高さ約4mの壮大な堤がめぐる。主体部は、全長約13m以上で、手前から奥にむけて羨道・墓室状区画・前室・玄室（後室）から構成される複室構造で、通称榛原石と称される流紋岩質溶結凝灰岩を磚状に加工した石材による壁体構成を特徴とする所謂「磚槨式石室」である（宮内庁陵墓課 2008）。この石室は、大和盆地南東部の桜井市から宇陀地域にかけて分布するもので、奈良市の黄金塚古墳の存在は、特別なものである（磚槨式石室研究会 1994）。ただし、この石室構造は、大和盆地南東部の集中域の磚槨式石室には認められないもので、その意味では特異な存在である。

この黄金塚古墳の石室と宝塔山古墳の石室が非常によく似ている点が注意される点である。石室平面図構成を比較してみると、玄室、前室、羨道は非常に近い比率配分であり、共通した設計原理に基づいている可能性が極めて強い。壁面を漆喰塗布により白壁に仕上げている点も共通している。

今後の詳細な検討を期したいと考えているが、現段階では、一方からもう一方への單一方向的な関係を考えるより、双方向的な考え、すなわち同じ設計原理を共有して石室が実現されていると考えたい。

## (5) おわりに

総社古墳群の7世紀の展開過程は、単に一地方豪族の終末期の動向を物語ることにとどまるものではないと考えられる。列島の中央集権的体制への移行過程の中で、この勢力が果たした役割を示すものであると考えられる。その場合、特に注意する必要があるのは、古墳の内容に見られるヤマト政権との特別な関係性を物語る諸要素である。その意味では、7世紀の古墳造営、とりわけ宝塔山・蛇穴山古墳の造営事業の中に、列島支配の新体制の展開とそれに結びついた地域勢力の連携を積極的に表示する記念物としての表示意図もあったものと思われる。このような特徴を有している総社古墳群との直接的関係の中で、並行して推進された山王廃寺の造営事業も見ていく必要があると思われる。

## 引用・参考文献

- 秋池 武 2000 「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義」『群馬県立歴史博物館研究紀要』21
- 秋山日出雄 1979 「桧隈大内陵における石室構造」『檍原考古学研究所論集』5 吉川弘文館
- 尾崎喜左雄 1966 『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 丸山竜平 1971 「近江石部の基礎研究」『立命館文学』312
- 右島和夫 1985 「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」『群馬県史研究』22
- 右島和夫 1993 「角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景」『古文化談叢』30集下
- 右島和夫 1994 『東国古墳時代の研究』学生社
- 右島和夫 2011 「観音山古墳とその周辺」『勝部明生先生喜寿記念論文集』
- 宮内庁書陵部陵墓課 2009 「黄金塚陵墓参考地墳丘および石室内現況調査報告」『書陵部紀要』59
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998・1999 『錦貫観音山古墳』I・II
- 磚槨式石室研究会 1994 『舞谷古墳群磚槨式石室の研究』
- 前橋市教育委員会 1996 『総社愛宕遺跡』

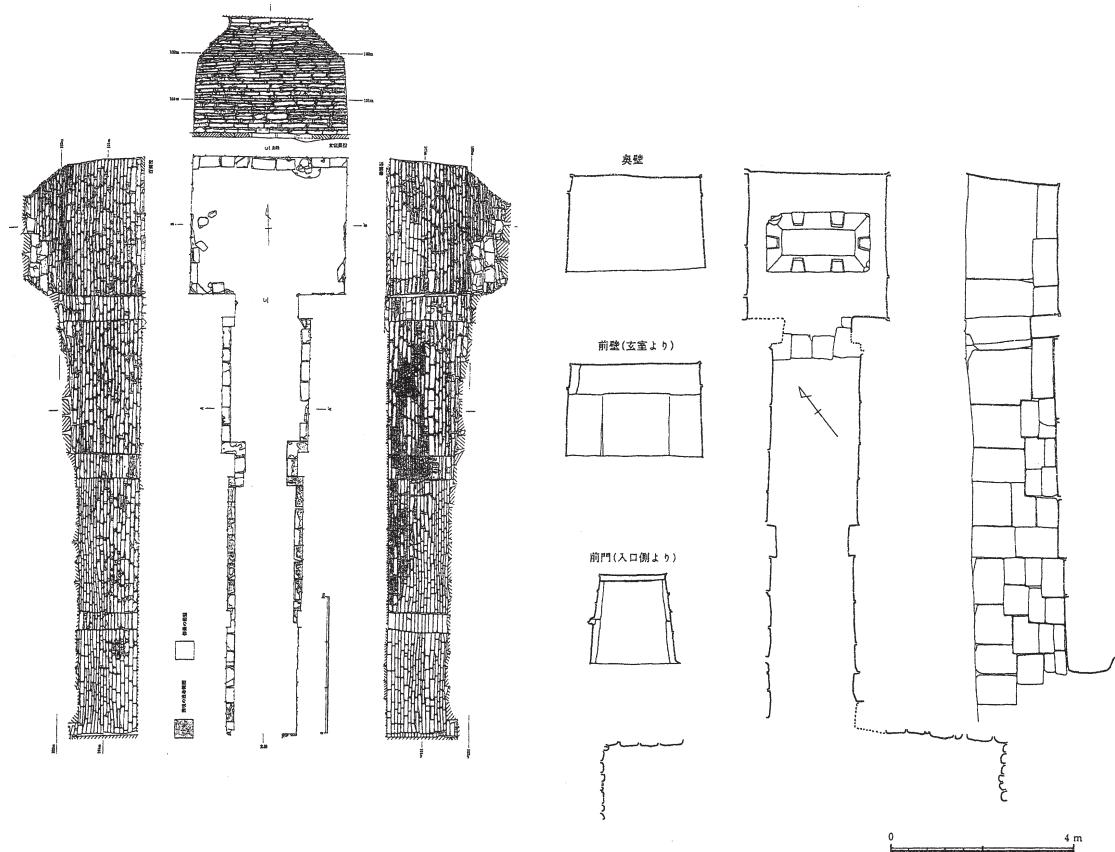


Fig.61 奈良市黄金塚陵墓参考地と宝塔山古墳の石室比較

### 第3章 山王廃寺等委員会まとめ

上野地域の主要古墳変遷図（『全国古墳編年集成』雄山閣より）



愛宕山古墳墳丘空中写真



宝塔山古墳の東側から周壕を介して墳丘を望む



### 宝塔山古墳石室（前室から玄室を望む）



### 蛇穴山古墳石室（入口前から望む）

Fig.62 上野地域の主要古墳変遷図他